

元国連難民高等弁務官で国際協力機構(JICA)理事長の緒方貞子氏が5月18日から3日間、四国を視察した。県内では、アフリカ・ザンビアなどで国際協力に取り組む吉野川市のNPO法人TICO、元青年海外協力隊員の雇用や外国人研修生の受け入れに熱心な健祥会グループを訪問した。四国、徳島の印象をまとめてもらった。



おがた・さだこ 1927年、東京都生まれ。聖心女子大、ジョージタウン大学院を経て、カリフォルニア大バークレー校で政治学博士号取得。上智大教授、国連難民高等弁務官などを経て、2003年からJICA理事長。

県とアフリカ・アジアの現場で実践されつつあることに感銘を受けた。東日本大震災では、日本の開発援助を受けて来た開発途上国からの支援の申し出が相次いだ。このことは、国際協力が日本から途上国への一方通行にはとどまらないことをあらためて思い起こさせてくれた。グローバル化が進む国際社会の中で、わが国と途上国との

「海外・国内の双方の

からこれまで累計225門教育大学と協力して、課題をつないでその解決人が53カ国に派遣されて主にアジア、アフリカなどに貢献できないか」。3いる。現在も12人が11カ国からの研修員に、理数科教育の指導法などの研修を行っている。

月11日の東日本大震災以降で活躍している。うち7人は女性隊員と聞く。今回の四国訪問の目的の頭から離れなかった。JICAは世界に90の拠

わが国の国際協力、途点を置いて途上国支援には、JICA事業の関係

上国支援は、実は日本全に従事しているが、国内に者や各地域のリーダーと国地域・地元の方に大も14カ所の国際センターをお会いして、地域の特色をを活かし、地域と途上国大きく依存していると言っ・支部を持ち、地元の協力を得て途上国からの研とをつなかりを通じてよい。青年海外協力隊修員へのトレーニングを「海外の課題と国内の課題の双方を解決できるよ

行っている。高松にある題の双方を解決できるよ四国支部は四国全県を方うな『内外一元化』の国バーし、徳島県では、鳴国際協力』の可能性につい

途上国支援 一方通行でない

活動通し地域も豊かに

て考えることだった。

今回の徳島訪問で印象四国には、瀬戸大橋がに残ったものに、吉野川開通したところに何度か家族旅行で訪れたことがある。阿讃山脈の新緑、吉野川の流れを見て、あらためて四国の自然を感じて徳島に入った。四国には、素晴らしい医療活動を行っている。

自然、優れた地場産業がある一方、少子高齢化や人口減で、農業後継者問題や労働人口の減少といった問題を抱えていると聞く。今回訪問した健祥会の東みよし町の老人介護施設でも、インドネシアやフィリピンから来た介護士が生き生きと日本のお年寄りの世話をしている姿が印象的だった。

一方、国内では、吉田修代表の経営する「さくら診療所」を拠点に地域医療を行い、地元での信頼も厚い。TICOメンバーの大半は青年海外協力隊出身者とのことだ。地域での経験を生かした国際協力を、海外のニーズと結び、また地域医療活動に役立てるといった、内外一元化の国際協力が、徳島

相互依存関係は、ますます深まっていくことだろう。わが国が世界と共存共栄を図るためには、国内各地域が有する地場産業などの豊かな技術や、地域おこしの経験を、海外のニーズと結び付けて、その活動を通して地域を豊かにしていく必要があると

感じた四国訪問だった。



5月に四国視察 緒方JICA理事長